様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：基盤研究(A)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５２５３１０７

研究課題名（和文）アジア圏における看護職の文化的能力の評価と能力開発・臨床応用に関する国際比較研究

研究課題名（英文）Evaluation and Promotion of Cultural Competence of Nurses in Asia

研究代表者
野地　有子（Noji, Ariko）

千葉大学・大学院看護学研究科・教授

研究者番号：４０２２８３２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　31,400,000円

研究成果の概要（和文）：わが国の病院における外国人患者受入れの実態を踏まえて、看護職の文化的能力を測定し、国際比較を参考に、わが国の看護職の文化的能力開発の教育モジュールの開発と臨床応用にむけた実装展開を推進した。回答195病院の文化的能力院内教育は10%未満であり、7,494名の看護職の文化的能力はJ-CCCHC測定で平均1.85（SD=.52)と国際比較で低値であった。外国人患者を受け持ったことがある看護職は72.5%であり、困っていることは言語と文化の障壁が主であった。看護職の文化的能力開発のための、教育モジュールとセルフチェック等を含むアプリ（http://ancc.link/app）を作成した。

研究成果の概要（英文）：This study investigates the actual conditions of providing health care services to the foreign patients in the Japanese hospitals and evaluates cultural competence among Japanese clinical nurses using the Japanese version of the Caffrey Cultural Competence Health Services (J-CCCHC). Of the 195 participating hospitals, those providing in-service education regarding cultural competence were less than 10%. The average score on J-CCCHC of 7,494 Japanese clinical nurses was 1.85 (SD=.52), which was lower than the international studies. The Japanese version inventory, J-CCCHC, was developed and its construct validation performed first in this study. Of the participants, 72.5% nurses had the experience of caring for foreign patients and their major difficulties were communication and cultural barriers. An application was developed (http://ancc.link/app) and implemented to improve the cultural competence of nurses in Asia.

研究分野：看護管理学

キーワード：看護職の文化能力　病院の国際化　アジア圏　外国人患者　カルチュラル・コンピテンス　能力開発と評価　アプリ開発　J-CCCHC

１．研究開始当初の背景

2010 年の閣議決定で、国際医療交流（外国人患者受入れ）は、「元気な日本」復活のシナリオにおいて国家戦略プロジェクトに位置づけられた。2014 年には、今後 10 年程度を目処に、健康・医療戦略の国際展開で、在留外国人等が安心して医療サービスを受けられる環境整備等の推進および、2020 年オリンピック・パラリンピック東京大会等に関して、医療通訳等が配置された拠点病院の整備が進められることとなった。インバウンド医療国際展開が国レベルで着手され始めたが、通訳配置、医療費未払いへの対応などに留まり、外国人患者対応で困っている看護職の課題に直接結びつくものはまだ少ない。また、わが国の看護職の文化対応能力（カルチュラル・コンピテンス）に関するデータもみられない。

２．研究の目的

わが国の病院における外国人患者受入れの実際を踏まえ、看護職の文化対応能力（カルチュラル・コンピテンス）を測定する。国際比較による特徴から、わが国の看護職の文化対応能力開発の教育モジュールを開発し、臨床応用にむけた実装展開を推進する。能力開発評価のベースラインとすることを目的とした。

３．研究の方法

（１）病院と看護の国際化の現状を把握するために、国内外の病院への聞き取りと、米国 CLAS（Cultural and Linguistic Appropriate Standard）ガイドライン等を踏まえた質問紙を開発し全国調査を実施した。アジア圏では、韓国においてソウル国立大学病院ほか 5 病院、1 診療所、タイ王国コンケーン地域において 3 病院での現地聞き取り調査を実施した。（２）その中から、看護職員のカルチュラル・コンピテンス調査参加病院を募り、カフリーらが開発した質問紙の日本語版（The Japanese version of the Caffrey Cultural Competence Health Services：J-CCCHC）を作成し、看護職のカルチュラル・コンピテンスを測定した。日本語版 J-CCCHC の統計的評価も実施した。（３）併せて外国人患者への対応で困難な看護臨床場面に関する自由記載のテキストマイニング分析より、（４）文化対応能力開発の教育モジュールを開発し、臨床応用にむけた実装展開を推進した。（５）アジア圏の韓国、タイ王国、オーストラリアに加えて、フィンランド、米国の研究者を招聘し、3 回の国際シンポジウムを公開で実施した。研究組織は、CBPR（Community-Based Participatory Reach）で組織した。調査毎に研究代表者の所属大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

４．研究成果

（１）病院調査票は、CLAS の 15 分類、NQF(National Quality Forum)45 項目 7 ドメインを外的基準として、42 項目の調査票を作成した。JCAHO（Joint Commission：Accreditation, Health Care, Certification）評価基準、JMIP（Japan Medical Service Accreditation for International Patients）評価票と照らして、内容が相当するもの、一致しない独自の項目が本調査票に含まれることを確認し、プレテストを実施した。対象施設は、国内の大学病院、国立病院機構、JA 厚生連病院、エイズ治療拠点病院、外国人結核患者の多い 10 都道府県にあるすべての結核治療病院、在留外国人対人口比上位自治体 40 が含まれる都道府県にある公立病院、JCI/JMIP 取得病院、医学中央雑誌で外国人診療および看護に関する報告にある医療機関等で有り、重複を除いて 581 施設であった。回答は看護部長に依頼した。195 病院から回答（有効回答）があった（回収率 33.6%）。開設者区分では、多い順に、公的医療機関 92 件（47.2%）、国 37 件（20.0%）、その他 35 件（17.9%）であった。施設の方針として外国人患者を受け入れる動きについては、「ある」45 件（23.0%）、「どちらともいえない」76 件（40.0%）、「ない」71 件（36.4%）であった。専門の対応部署は、「ある」29 件（14.9%）、「ない」166 件（85.1%）であった。職員用の対応資料は、「ある」45 件（23.1%）、「ない」148 件（75.9%）であった。院内教育プログラムは、「実施（予定含む）」18 件（9.2%）、「実施していない」174 件（89.2%）であった。特別な対応について、薬物療法でみると、「説明への工夫」が 95 件（48.7%）と最も多かった。地域のニーズアセスメントは、「している」41 件（21.0%）、「していない」145 件（74.4%）であった。看護部としての国際交流は、「ある」51 件（26.2%）、「ない」141 件（72.3%）であった。診療・看護上のトラブルは、「ある」45 件（23.1%）、「ない」143 件（73.3%）であった。外国人患者を積極的に受け入れている病院ほどトラブルがある割合は有意に高かった。一方、院内教育は両群とも 90%以上が実施していなかった。職員の文化対応能力を高めることにより、トラブル防止へのアクションを取ることの必要性が示された。

外国人患者に対して適切なケアを提供するためには言語的支援が重要となるが、外国語対応可能な院内スタッフを通訳者として活用している病院は 50.7%であるのに対し、外部通訳をいつでも利用できる病院は 27.1%にとどまり、通訳サービスへの予算計上は 195 施設中 7 施設（3.6%）のみであった。また、病院における外国人患者の使用言語と、法務省統計にみる在留外国人数の割合とには違いがみられた。

（２）看護職のカルチュラル・コンピテンスは、J-CCCHC を用いて測定した。CCCHC は、米国における文化的対応能力（CC）を評価する尺度として開発され、28 項目 5 段階リ

ッカトスケールで合計点の高いほど CC 能力が高い。Wells（2000）の学習モデルを基盤とし、回答者の自覚的な知識、セルフアウェアネス、文化対応能力のスキルに対する自信について問うものである。属性および海外経験や、外国人患者の看護ケアで困ったことの自由記載を含む調査票を作成した。先の病院調査に参加した施設の中から 19 病院の全看護職 9140 名を対象に留め置き法で実施した。有効回答は、7494 名（82.0%、92%女性、平均年齢 32.6 歳）であった。バリマックス回転にて 5 因子 knowledge, comfort-proximal, comfort-distal, awareness, awareness of national policy(因子寄与率 62.31%)が示された。クロンバックαは 0.756 から 0.892 であった。確証的因子分析（CFA）の結果、RMSEA=.058, TLI=.891,CFI=.903, SRMR=.059 であった。CCCHC の CFA 検証は、本調査データにおいて始めて実施された。わが国の看護職（N=7494）の J-CCCHC の平均得点は、1.85（SD＝.52）であった。カフリーら（2005）による最初のデータは、M=3.60（SD=.59）であった。その後、Von Ah& Cassara(2013)は、M=3.34（SD=.43）と報告している。J-CCCHC を用いて測定した、わが国の病院における看護職のカルチュラル・コンピテンスは低い傾向にあることが示された。

（３）外国人患者へのケア提供に際して看護師が持つ困難さについて、テキストマイニング分析を行った。（２）の回答者のうち、外国人患者を受け持ったことのある者は 5430 名（72.5%）であった。そのうち、困難事例についての記載は、4738 名（63.2%）みられた。出現頻度トップ 50 のコンセプトは多い順に、コミュニケーション（2736）、言語（2669）、言葉が通じない（1842）、英語（639）、日本語（577）、患者（529）、違い（465）、説明（438）、理解（353）、文化（334）、以下、ジェスチャー、医療看護専門用語、通訳であった。言語的コミュニケーションの壁に関連する項目に続いては、症状、患者の訴え、看護ケアに関連する内容があげられた。カテゴリー化により、12 カテゴリーと 47 サブカテゴリーが抽出された。カテゴリー間の関連図より、診療、ケア、日常生活、苦情、トラブル、看護師の体験、環境・看護管理のコアカテゴリーが示され、関連図（図 1）が作成された。これに加えて、時間軸やクリティカル場面などの状況設定による対応策の検討が有効考えられた。

（４）わが国の看護職のカルチュラル・コンピテンス能力開発領域として、（３）のテキストマイニング分析の結果、図 2 に示す 4 領域があげられた。ＣＣ能力開発の指針として、教育モジュールを開発の実装展開を推進し、プラットフォーム構築を行った。すなわち、臨床において、看護職が身近に活用できる、アプリ開発を行った。今後も継続した取り組みにより、コンテンツの充実と活用をすすめる。

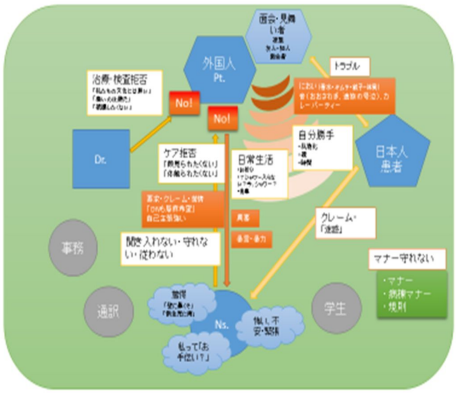

図 1. 看護職が困ったことのカテゴリー間の関連図

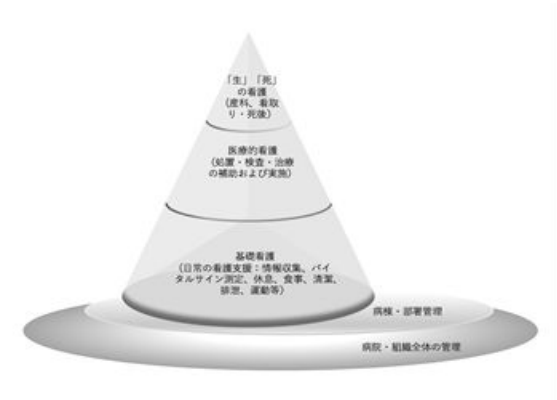

図 2. 看護職のカルチュラル・コンピテンスの能力開発領域
（全国看護職調査結果より）

（５）アジア圏の韓国、タイ王国、オーストラリアに加えて、フィンランド、米国の研究者を招聘し、3 回の国際シンポジウムを公開で実施した。

❑第 1 回 ANCC(Asian Nurses' Cultural Competence）国際シンポジウム
日時：平成 26 年 3 月 8 日（土）・9 日（日）
場所：千葉大学けやき会館大ホール
テーマ：看護職の文化能力
・モース先生によるミックスド・メソッド国際ワークショップ
（Pakvilai Srisaeng, RN, PhD コンケーン大学）
・看護職の文化能力（1）ソルトレイクシティ冬季オリンピックの経験から
（Janice Morse, RN, PhD　ユタ大学教授）
・看護職の文化能力（2）
（Lauren Clark, RN, PhD　ユタ大学教授）
・看護実践に向けた異文化理解
（Orasa Kongtain, RN, PhD コンケーン大学）
・看護学生の看護能力を高める取り組み

（Hesseung Choi, RN, PhD ソウル国立大学）
・看護師の文化能力を高める取り組み
（Katsuko Tanaka, RN, DNP ワシントン大学）
・服薬方法からみた異文化の課題
（Jun Kojima, PhD 医療研究資源開発研究所）

❑第 2 回 ANCC(Asian Nurses' Cultural Competence) 国際シンポジウム
日時：平成 26 年 3 月 14 日（土）・15 日（日）
場所：東京医科歯科大学 M&D タワー
テーマ：病院および看護の国際化について-米国 CLAS ガイドラインから学ぶ
・ Assessing Domains, Competencies and Milestones (Mary Jo Clark, RN, PhD USD)
・ Globalization for Hospital and Nursing Administration: Lessons learned from CLAS (Julia Puebla Fortier, DiversityRx)
・地域医療と観光地の狭間で
（林久美子、JA 倶知安厚生病院　看護部長）
・国内病院調査の中間報告
（野地有子、千葉大学大学院看護学研究科）

❑第 3 回 ANCC(Asian Nurses' Cultural Competence) 国際シンポジウム
日時：平成 27 年 3 月 10 日（日）
場所：千葉大学看護学研究科
テーマ：カルチュラル・コンピテンスの潮流
・Julia Puebla Fortier, DiversityRx
・Lidia Horvat, Policy Officer, Victoria, Australia
・Hesseung Choi, RN, PhD ソウル国立大学
・Pakvilai Srisaeng, RN, PhD コンケーン大学
・野地有子、辻村真由子、山下純、望月由紀

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 11 件）

1.Ariko Noji, Yuki Mochizuki, Akiko Nosaki, Dale Glaser, Lucia Gonzales, Akiko Mizobe, Katsuya Kanda: Evaluating cultural competence among Japanese clinical nurses: Analyses of a translated scale, International Journal of Nursing Practice, 23(supple.1) in press, Journal of Nursing and Human Sciences, 2017, 査読有.

2.炭谷大輔，野地有子，大島紀子：我が国の保健医療福祉におけるゲーミフィケーションの活用と課題，日本健康科学学会誌，33(1)51-61，2017，査読有.

3.望月由紀，野地有子，パクビライ　スリサング，長谷川みゆき：タイ王国東北部地域の病院看護部から見た病院と看護の国際化対応の現状調査～３病院への聞き取りから～，千大看紀要（38），69-74，2016，査読有.
http://opac.ll.chiba-u.jp/da/curator/100100/AA12516447_38_p069_MOCH.pdf

4.Janice Morse, Lauren Clark, Tracii Haynes, Ariko Noji: Providing cultural care behind the spotlight at Olympic Games, International Journal of Nursing Practice ,21(supple.1)45－51. Journal of Nursing and Human Sciences, 2015, 査読有.

5.野地有子：病院と看護の国際化に向けた文化対応能力の評価－国内病院調査の中間報告－日本看護評価学会誌,5(2)74-78，2015.

〔学会発表〕（計 32 件）（再掲招聘 5 件）

1.Yuki Mochizuki, Ariko Noji, Mari Kondo, Yukiko Iioka, Akiko Nosaki, Masae Nishiyama, Eiko Ootomo, Manami Sakamoto, Daisuke Sumitani：Educational nursing application to cultivate cultural competence in Japan，EAFONS，HongKong，2017.3. 査読有.

2.野地有子，野崎章子，望月由紀，北池正，溝部昌子，菅田勝也：わが国の看護職のカルチュラル・コンピテンス能力開発領域に関する研究－テキストマイニング分析から－,第７回日本看護評価学会学術集会講演抄録集,41, 東京工科大学蒲田キャンパス, 東京都, 2017.3.査読有.

3.Akiko Nosaki,Ariko Noji,Tomoko Suzuki, Yuki Mochizuki,Tadashi Kitaike,Daisuke Sumitani:Difficulties in delivering nursing care to foreign patients among Japanese registered nurses,5th World Congress of Clinical Safety 2015,Boston, USA,2016 年 9 月，査読有.

4.Ariko Noji, Mayuko Tsujimura, Yuki

Mochizuki, Tomoko Suzuki, Akiko Mizobe, Daisuke Sumitani, Ryoko Yanagibori, Katsuya Kanda, Julia P.Fortier, Noel J.Chrisman: Community and Hospital Relationship for Cultural Appropriate Health Care Services in Japanese Hospitals. The 3rd Korea-Japan Joint Conference on Community Health Nursing (Pusan, Korea), 2016.7，査読有.

5.Tomoko Suziki,Ariko Noji,Mari Kondo, Yuki Mochizuki,Mayuko Tsujimura,Ayumi Wakasugi,Ayako Aihara,Heeseung Choi: Measuring the cultural competence of Japanese nursing students using the Cultural Awareness Scale，EAFONS，幕張メッセ国際会議場，千葉県，2016 年 3 月 14-15 日，査読有.

6.溝部昌子，野地有子：医療の国際化に向けた看護の課題，第 34 回日本看護科学学会学術集会講演集，482，名古屋国際会議場，愛知県，2014.11，査読有.

7.辻村真由子，野地有子，若杉歩：韓国の病院とクリニックにおける外国人患者への対応の実際：外国人に安全に医療を提供するための看護管理，第 34 回日本看護科学学会学術集会講演集，481，名古屋国際会議場，愛知県，2014.11，査読有.

8.辻村真由子，野地有子，北池正，西山正枝，池袋昌子：韓国の病院における外国人患への対応の現状と課題-看護師の文化的対応能力のアセスメントツールの作成に向けて．日本健康科学学会第 29 回学術大会抄録集，195，国立オリンピック記念青少年総合センター，東京都，2013 年 8 月，査読有.

〔その他〕
ホームページ
http://ancc.link/
アプリ
http://ancc.link/app/

６．研究組織

(1)研究代表者
野地　有子（ARIKO　NOJI）
千葉大学・大学院看護学研究科・教授
研究者番号：40228325

(2)研究分担者
北池　正（TADASHI　KITAIKE）
千葉大学・大学院看護学研究科・教授
研究者番号：40254560
池崎　澄江（SUMIE　IKEZAKI）
千葉大学・大学院看護学研究科・教授
研究者番号：60445202
辻村　真由子（MAYUKO　TSUJIMURA）
千葉大学・大学院看護学研究科・准教授
研究者番号：30514252
望月　由紀（YUKI　MOCHIZUKI）
千葉大学・大学院看護学研究科・特任准教授
研究者番号：70400819
野崎　章子（AKIKO　NOSAKI）
千葉大学・大学院看護学研究科・講師
研究者番号：90361419
山下　純（JYUN　YAMASHITA）
千葉大学・医学部附属病院・薬剤師
研究者番号：40726543
鈴木　友子（TOMOKO SUZUKI）
千葉大学・大学院看護学研究科・助教
研究者番号：10727720

(3)連携研究者
菅田　勝也（KATSUYA　KANDA）
藍野大学・医療保健学部看護学科・教授
研究者番号：20143422

(4)研究協力者
炭谷　大輔（DAISUKE SUMITANI）
千葉大学・大学院看護学研究科・特任研究員
研究者番号：40788494
柳堀　朗子（RYOKO　YANAGIBORI）
公益財団法人ちば県民保健予防財団・部長
溝部　昌子（AKIKO　MIZOBE）
研究者番号：00625684
国際医療福祉大学福岡看護学部・准教授
Noel Chrisman
ワシントン大学・教授
Julia P Fortier
DiversityRx 代表
Pakvilai Shrisaeng
KohnKaen 大学（Thailand）・准教授
Hesseung Choi
Seoul National University(South Korea)・准教授
Lucia Gonzales
サンディエゴ大学（USA)・准教授
Dale Glazer
サンディエゴ大学（USA)・准教授